大君の結婚問題に関する一考察

―「隔てなき心」を中心に―

金　玉　京*

（e-mail ： itsoon@hanmail.net）

目　次

一　はじめに
二　源氏物語の「隔て」
三　「隔て」をめぐる薫と大君
四　大君の「隔てなき心」
五　大君の死
六　おわりに

一　はじめに

源氏物語の大君は、薫という男性の求婚を受け入れず、はかなく死んでゆく女性である。こうした大君のあり方は、よく「結婚拒否1)」という問題としてとりあげられ、それが第二部の紫の上の男性不信や愛情不信から導かれたものと考えられてきた2)。しかし、晩年の紫の上によって提起された問題は、女三宮の降嫁をきっかけに、それまでは深く考えていな

＊ 韓南大学校 講師 平安文学専攻

1) 大君に関する多くの研究は、晩年の紫上の心情を受け継いだとする「結婚拒否」を前提にして行われてき、深沢三千男氏の「結婚拒否は薫の〈先天的〉道心同様むしろ大君物語の前提条件なのであって、いかに拒否を維持するかが重要な物語形成上の問題となって行った」という設問の仕方がそれを端的に表している。これは大君の問題を「結婚拒否」に限定してしまう恐れがある。しかし、こうした立場から大君を論じる傾向は、いまだに根強い。「宇治十帖物語の形成をめぐって」（『源氏物語の形成』桜楓社、1972、p.228）。武原弘「宇治十帖研究序説―大君の人物像をどう把握するか―」（『国文学研究』1968、p.39）。

2) 森岡常夫「宇治の大君論」（『平安朝物語の研究増補版』風間書房、1967、p.107）、清水好子「源氏物語の主題と方法」（『源氏物語研究と資料―古代文学論叢―』第一輯、武蔵野書院、1969、p.130）

www.kci.go.kr

かった源氏との夫婦関係における自分のはかなく不安定なあり方を実感したことによるもので、源氏への不信そのものが物語の主な関心事ではなかった3)。大君の場合も、物語の追求するところは、薫の気持ちに答えたいと思いながらも、それを受け入れられない大君の心境や態度にあって、男性不信や愛情不信による「結婚拒否」そのものにあるわけではない。そもそも大君は薫との結婚を拒否しているのではなく、自分の置かれた境遇ゆえに結婚をあきらめていたのである。大君が薫と結婚できないとする最大の理由は、結婚生活を支える保護者のいない状況にあり、大君はそのことを繰り返し考えている4)。

今一つ、大君は薫と結婚できない理由として父の遺言を口にしている5)。この八宮の遺言は、大君の「結婚拒否のモチーフ6)」ともいわれている。しかし、大君の父の遺言に従う生き方は、妹の中の君や女房の弁の尼などの発言からも明らかなように、薫との結婚をさける理由としてはあまり説得力をもっていない7)。さらに大君本人も、「故宮も、さやうなる心ばへあらばと、をりをりのたまひ思すめりしかど、（総角・240）」とあるように、父が薫との結婚をほのめかしていたことを思い出しているなど、遺言の本意を理解している。大君は父の遺言を自分に言い聞かせることで、あきらめた薫との結婚を自ら納得しているのであろう。要するに、大君は父のときから親しくしてきた薫に好意を持っていながらも、自分の状況からこの結婚は不可能だとあきらめ、その理由をあれこれ探して自らを納得しようとしていた。決して薫との結婚を拒否しているのではない。

また、大君は薫と結婚できないと思っているものの、薫との関係をやめようとは思っていない。「隔て」に関する大君の態度がそれをよく示している。しかし、どうして大君は薫との結婚を避けながらも、彼と関わり続けようとするのか。

以下、本稿は「隔て」という語を中心にして、大君の薫との結婚問題におけるあり方を

---

3) 拙稿「孤独な紫上―若菜の源氏との対話場面―」（『日本語日本文学論叢』創刊号、2006、p.69）参考

4) 「みづからの上のもてなしは、また誰かは見あつかはむ（総角・240）」、「一ところおはせましかば、ともかくもさるべき人にあつかはれたてまつりて、宿世というなるかたにつけて（総角・246）」など、大君は薫との結婚話に際して、後見者のいないわが身の上を残念に思っている。―以下、源氏物語の本文引用ページは、新編日本古典文学全集『源氏物語』による。これについては、すでに増田繁夫先生のご指摘がある。（「大君の死」（『講座源氏物語の世界』第八集、有斐閣、1983、p.187）

5)「わが身ひとつにあらず、過ぎたまひにし御面伏に、軽々しき心ども使ひたまふな。おぼろけのよすがならで、人の言にうちなびき、この山里をあくがれたまふな。ただ、かう人に違ひたる契りことなる身と思しなして、ここに世を尽くしてんと思ひとりたまへ。（椎本・185）」
要するに、この八宮の遺言は、娘たちが宮家の人間としてその誇りを失うことなく生きることを願ったものである。

6) 野村精一「源氏物語の問題―宇治十帖の人間像（一）」（『国文学研究』1959、p.66）

7) 「一ところをのみやは、さて世にはてたまへとは聞こえたまひけむ。はかばかしくもあらぬ身のうしろめたさは、数そひたるやうにこそ思されためりしか。（総角・245）」、「故宮の御遺言違へじと思しめす方はことわりなれど、それは、さるべき人のおはせず、品ほどならぬことやおはしまさむと思して、戒めきこえさせたまふめりしにこそ、この殿のさやうなる心ばへものしたまはましかば、一ところをうしろやすく見おきたてまつりて、いかにうれしからましと、をりをりのたまはせしものを、（総角・249）」

www.kci.go.kr

明らかにしたい。

二　源氏物語の「隔て」

「隔て」という語は、「二つの物の間に境界を立てて、互いに見えず、行き来できなくするのが原義[8]」で、空間・時間・心理的な距離を指すときに使われている。源氏物語では、「隔て」をめぐっての様々な人間関係が描かれていて、中でも、源氏と夕顔・源氏と紫の上・薫と大君の男女関係でもっとも多く用いられている[9]。以下はこの物語に用いられている「隔て」の様相について考える。

まず、源氏と夕顔の関係における「隔て」を見てみたい。

二-1　源氏と夕顔

某院に夕顔を連れこんだ源氏は、いつまでも名前を隠して明かさない夕顔の他人行儀な態度を恨む。要するにこの二人の関係は、互いの素姓をよく知らないながらも結ばれたという他の男女関係とは違う特殊さがある。「隔て」という語もまたこうした二人の関係性をよく表すものとして用いられている。

> げに、うちとけたまへるさま世になく、所がらまいてゆゆしきまで見えたまふ。「尽きせず隔てたまへるつらさに、あらはさじと思ひつるものを。今だに名のりしたまへ。いとむくつけし」とのたまへど、「海女の子なれば」とて、さすがにうちとけぬさまいとあいだれたり。「よし、これもわれからなり」と恨み、かつは語らひ暮らしたまふ。（中略）たとしへなく静かなる夕の空をながめたまひて、奥の方は暗うものむつかしと、女は思ひたれば、端の簾を上げて添ひ臥したまへり。夕映えを見かはして、女もかかるありさまを思ひの外にあやしき心地はしながら、よろづの嘆き忘れてすこしうちとけゆく気色いとらうたし。つと御かたはらに添ひ暮らして、物をいと恐ろしと思ひたるさま若う心苦し。格子とく下ろしたまひて、大殿油まゐらせて、「なごりなくなりにたる御ありさまにて、なほ心の中の隔て残したまへるなむつらき」と恨みたまふ。
> （夕顔・162～163）

ここで源氏は、素姓を隠している夕顔に対して、繰り返し「隔て」という言葉を口にしている。源氏は打ち解けているように見えながらも、自分の存在を明かさない夕顔に対していら

8）大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』（p.1150）

9）源氏物語の「隔て」という語は、夕顔と雲居雁をめぐる内大臣と大宮親子関係、玉鬘をめぐる源氏と兵部卿宮や須磨退去をめぐる源氏と朱雀院などの兄弟関係、あるいは源氏と内大臣、夕霧と柏木、薫と匂宮などの友人関係、また右近と浮舟などの主従関係においても用いられていて、人間関係全般にわたって使われている。ただ、その中でも夫婦や恋人同士の葛藤を表すのに集中的に使われている。

www.kci.go.kr

だたしさを感じ、自分の真情を訴えているのである。

さらに、夕顔の死後、夕顔の素姓を聞かされた源氏は、乳母子の右近に向かっても、「さばかりに思ふを知らで隔てたまひしかばなむつらかりし（夕顔・184）」といったり、「我はしか隔つる心もなかりき（夕顔・184）」といったりして、最後まで名前を隠していた夕顔のことを恨み、自分は夕顔に対して隔てをつける気持はなく、ただ気兼の多い身の上であるため、どうしようもなかったと吐露している。

このように源氏と夕顔の場合は、男女の深い仲になったにもかかわらず、どこの誰か知られまいとしていた夕顔の心の距離を嘆く源氏の一方的な態度として「隔て」が繰り返され、二人の特殊な関係性が浮かび上がってくる。

それでは、源氏と紫の上における「隔て」は、どのような用いられ方になっているのであろうか。

二－2　源氏と紫の上

源氏と紫の上の関係では、源氏に新しい女性問題が現れるたびに、「隔て」を契機にして、二人は互いの信頼の深さを確かめあっている。たとえば、源氏は明石の君との関係が、うわさによって紫の上に知れ渡るのを「戯れにても心の隔てありけると思ひ疎まれたてまつらんは、心苦しう恥づかしう（明石・259）」思い、自ら明石の君との関係を明かしている。そして、京の紫の上への手紙には次のように書いた。

> 例よりも御文こまやかに書きたまひて、奥に、「まことや、我ながら心より外なるなほざりごとにて、疎まれたてまつりしふしぶしを、思ひ出づるさへ胸いたきに、またあやしうものはかなき夢をこそ見はべりしか。かう聞こゆる問はず語りに、隔てなき心のほどは思しあはせよ。誓ひしことも」など書きて、（明石・259）

源氏は、紫の上には隠し立てをしない、それは紫の上に対する心の深さを示すものであるとし、自ら明石の君との関係を明かすこともそうした自分の気持の表れであると言っている。また、相手の紫の上もこうした源氏の気持をわかっている。たとえば、源氏の朝顔との関係が新たに浮上し、その噂を聞いた紫の上は「さやうならむこともあらば隔てては思したらじ（朝顔・478）」と思っている。紫の上は、源氏は自分に隠し立てをしないので、こうした女性問題があれば、話すはずであると信じている。源氏は明石の君との場合も自ら明かしたのだから、紫の上はそう信じたいのである。しかし、今度の朝顔姫君の場合は、いろいろ言い訳をする気色もなく、真剣な顔付きでいる。女性関係における源氏のそれまでとは違う態度に紫の上の不安はつのる。しかも、朝顔は世間の声望も高く、源氏ともお似合いの間として世間の人々が言っている。源氏以外に身を寄せるところのない紫の上が不安を抱くのは当然である。このように、「隔て」は、源氏の紫の上に対する心の深さを示すものであり、

www.kci.go.kr

紫の上もそれを信じることで、二人の関係はうまいこと維持されてきた。

ところが、女三宮の降嫁を境にして、紫の上の源氏との間における「隔て」に関する態度は、以前とは異なってきた。というより、紫の上は、「姫宮の御事の後は、何ごとも、いと過ぎぬる方のやうにはあらず、すこし隔つる心添ひて、見知らぬやうにて（若菜上・79）」いた。つまり、この事件以前までの紫の上は、源氏の女性関係において隔てのないあり方で対していた。だからといって、源氏によって隔てがおかれたことを意味するのでもない。それは源氏の「ただかく何となく過ぐる年月なれど、明け暮れの隔てなきうれしさのみこそ、ますことなくおぼゆれ。（若菜下・208）」という言葉から確認できる。紫の上は源氏に対して、心の壁をつくったまま、それを引きずっている反面、源氏は紫の上とはいつまでも心の距離のない関係であると思い込んでいる。二人の関係の変化には、紫の上自らの成長が大きく作用していて、それに気が付かない源氏との間に気持のすれ違いが生じている。要するに、女三宮の降嫁をきっかけに、源氏と紫の上との間には心の溝が生じてしまい、「隔て」はそうした二人の心のすれ違いを表すものとしても用いられている。

このように「隔て」という語は、主に夫婦や恋人の心のあり方を問題にするときによく使われていて、ときには、物語の転換に伴うものとしても重要な役割をしている。それでは、薫と大君の関係における「隔て」は、どのように用いられているのか。

三　「隔て」をめぐる薫と大君

周知のごとく、八の宮の亡き後、薫はその娘たちを訪れ、後見役を果たしてその生活を支える。大君は父の時から続けて付き合いをしてきた薫を大事にもてなし、いつのまにか二人の間には親密な関係が築き上げられていた。そうする内に、薫は大君に心を寄せ始め、「隔てなき」間柄を求めるようになる。しかし、大君は薫から「隔て」ある態度をとっていると恨まれるたびに、普通の男女としては考えられない応対の仕方をとっていると繰り返し強調している。

例えば、八の宮の一周忌に宇治を訪れてきた薫は、大君への恋情を訴え、それが受け止められないと、大君に向かって「遠々しくのみもてなさせたまへば、かばかりうらなく頼みきこゆる心を違ひて恨めしくなむ」と、自分の深い信頼とは違う疎ましく他人行儀なあり方であると恨んでいる。それに対して大君は、次のように答えている。

> 違へきこえじの心にてこそは、かうまであやしき世の例なるありさまにて、隔てなくもてなしはべれ。それを思しわかざりけるこそは、浅きこともまじりたる心地すれ。（総角・226）

ここで大君は、薫の気持に従うためにこそ、世間から噂されるほどの有り様で対応していたのに、それをわかってくれないということは、薫の方に思慮の浅いところがあるからではない

www.kci.go.kr

かといっている。要するに大君は、薫を深く信頼している証として、女房の取次なしで薫に応対していたのであり、そうした自分の気持が薫に理解してもらえないことに不本意さを感じているのである。他にも、薫が大君のもとに押し入って、つのる思いを訴えていたときにも、大君は「かかる御心のほどを思ひよらで、あやしきまで聞こえ馴れしたるを、（総角・235）」と、薫の無理無体な行動を恨んでいる。さらに、八の宮の服喪の済んだ後宇治を訪れた薫は、大君を説得させようと大君のもとへ弁の尼を送るが、その弁を前にして大君は次のように語る。

> 人に似ぬ御心寄せとのみのたまひわたりしを聞きおき、今となりては、よろづに残りなく頼みきこえて、あやしきまでうちとけにたるを、思ひしに違ふさまなる御心ばへのまじりて、恨みたまふめるこそわりなけれ。（総角・248）

要するに大君は、現在の二人の関係は十分すぎるほど親密であると考えている。独身の若い大君が肉親でもない薫に女房の取り次ぎなしに自分の声を聞かせて話し合うことは、当時の男女のあり方としてありえないことであった。その意味で、大君は薫を身内同然と思って好意を持ち、それを態度として示している。勿論大君は、薫の求めている「隔てなき」関係に、ほぼ共感している。ただ、薫が弁に向かって、

> （大君とは）ただかやうに物隔てて、言残いたるさまならず、さしむかひて、とにかくに定めなき世の物語を隔てなく聞こえて、つつみたまふ御心の隈残らずもてなしたまはむなん（総角・230）

とあるように、「さしむかひて」という形には同意せず、納得もしていない。大君が空間的な距離を置くことは、それ自体心理的な距離をつくった証であり、その空間的な壁を崩してこそ、まことの心の「隔て」もなくなる、というのが薫の論理である。しかし、そこが大君とは違う。大君が、自分の寝所に忍び込んだ薫に、「隔てなきとはかかるをや言ふらむ。めづらかなるわざかな（総角・234）」とたしなめた所以がそこにある。大君は、すでに薫との間には心の壁はないとみている。

このように「隔て」は恋人や夫婦の間の心理的な葛藤状態を表すときによく用いられ、大君と薫においてもそうした側面は認められる。ただ、この二人の関係における「隔て」は、単なる二人の内的葛藤を描くためというよりも、むしろ「隔て」に対する大君の姿勢に注意すべきである。

四　大君における「隔てなき心」

大君は、薫の同じ人間としての親密な関係を強調して、「隔てなき心」を求めている言

www.kci.go.kr

葉に対しても、「かういとはしたなからで、物隔ててなど聞こえば、まことに心の隔てはさらにあるまじくなむ（総角・238）」と、物を隔てたまま対応していればこそ、心の距離も置かれまいとしている。こうした大君の発言は薫の言いよりを逃れようとする口実ではない。二人の間を遮断する「物隔て」を取り除くことは、世間からは結婚と見なされるもので、それは大君の望む形ではない。

匂宮よりはじめて手紙の届いた頃から、大君は中君とちがって、「かやうのこと戯れても、もて離れ給へる、御心深さなり（椎本・176）」と、相手に関心の対象になりうる余地を、すこしも与えない用心深さをもっていた。これは、男女の交際や結婚を避けるためというよりも、はじめから俗世の普通の生活をあきらめていた大君の姿勢を示している。また大君は、弁の尼に薫との結婚を勧められたときにも、

> 世に人めきて、あらまほしき身ならば、かかる御ことをも、何かはもて離れて思はまし。されど、昔より、思ひ離れそめたる心にて、いと苦し　（総角・248）

と、頑なに結婚には思いもよらない姿勢をみせている。すでに大君は、子供の頃から没落した家に育ったので、結婚をあきらめていた10)。その点からも、大君はいずれ出家するときのためにも絆となる妻を持つまいとしていた薫にふさわしい相手であった。

ただ、いくら薫が道心深くて、八宮や大君のように俗世を離れた生活に憧れる存在であっても、薫が俗世間の真っ只中に身を置いているかぎり、大君が薫と結婚することは、世俗の中に身を置くことを意味する。大君は、宇治という俗世を離れたところで、経済的な後援者もいない状況で薫と結婚することは、さらに苦しみを増やすことになると思った。匂宮と中の君の結婚生活がそれを裏付けている。薫のあり方がいくら匂宮と違うといい、それを信じていても、大君自信の事情は少しも変わらない。そこで大君は、夫婦という社会的な観念で結ばれた関係とは違う同じ人間としての深い心の結び付きによる関係を求めるようになった。「隔てなき心」に対する大君のあり方がその端的な例である。

> あやしき下人をひかへてぞ御返へり賜ふ。
> 　へだてなき心ばかりは通ふともなれし袖とはかけじとぞ思ふ11)
> 心あわたたしく思ひ乱れたまへる12)なごりにいとどなほなほしきを、おぼしけるままと待ち見たまふ人は、ただあはれにぞ思ひなされたまふ。　（総角・275）

10)日向一雅氏は、大君の幼少期に詠んだ「うき水鳥の契り」の歌に、はやくから大君はわが身の境遇を憂わしいものと思う独自な内面世界を育んできたことを指摘する。「宇治の大君―独身に徹しきった精神の品位」（『国文学解釈と鑑賞』2004、8、p.113）

11)心にはへたてなくともなれし袖とはいひかたしと也歌は見えたるまま也（源氏物語古注集成14『岷江入楚』桜楓社、p.247）

12)ありのままに思ふすちをいひのへたるをいへり草子地の評也歌はいかなる時も心つかひあるへしと也（源氏物語古注集成７『細流抄』おうふう、p.374）

www.kci.go.kr

これは、中の君の匂宮との結婚三日夜に薫から送られた歌に対する大君の返歌である。ここで大君は、「へだてなき心ばかりは通ふとも」と、心だけは通じ合う関係であることをいいながら、「なれし袖とはかけじとぞ思ふ」と、薫との間に肉体性は認めない13)。この歌は、大君の「心あわたたしく思ひ乱れたまへる」状態で詠まれているために、あれこれ工夫して自分の心情を何かにたとえて詠むという間接的な方法をとっていず、思ったことをそのまま纏めただけの、歌の読み方としては「いとどなほなほしき」情趣の乏しい歌になっている。しかしその分、大君の薫との関係における素直な感情が吐露されていると見るべきである。

このように、二人の間に肉体的な関係を認めない大君の姿勢には、精神性を強調する薫のあり方以上の精神性を求めていることがわかる。こうして男との間における内面性を重視する関係を正面切って言っている女性は、この物語で大君の他に例を見ない。大君にとっては、薫との間に「隔てなき心」を維持することこそ、これまで築いてきた薫との関係を保ちうる唯一の方法だと考えられたのである。こうした大君の薫との間の「隔てなき心」は、果たして保たれるのであろうか。

五　大君の死

大君は中の君の不幸な結婚生活を嘆き、「いかで亡くなりなむ、と思し沈むに、心地もまことに苦しければ、物もつゆばかりまゐらず（総角・300）」状態になる。当の本人の中の君は、匂宮との結婚生活をそれほど嘆いていないのに、大君はそれを自分のこと以上に思いつめて、あげくは死を願うまでに至る。こうした大君のあり方は、阿闍梨から父の夢話を聞かされている時にも、「いかで、かのまだ定まりたまはざらむさきに参でて、同じ所にもと聞き臥したり（総角・321）」とあった。すでに大君は、「ただ亡からむ後のあらましごと（総角・300）」を朝晩思い続けていたり、薫との関係においても、「むなしくなりなむ後の思ひ出（総角・319）」を意識したりするようになっていた。

やがて、病に臥した大君は、いよいよ出家を決心することになるが、しかしそれまた、生き延びるための方法というよりも、死の延長としてあって、もはや薫との結婚を避けがたいと判断しての結果であった。

みづからも、たひらかにあらむとも仏をも念じたまはばこそあらめ、なほかかるついでにいかで

13)「隔て」が歌に詠み込まれた用例は一七例で、主に「夜」や「夜の衣」などを伴って夫婦の仲のあり方を詠んだり、「霧」「霞」などを伴って、二人の間を遮るものを表している。この大君の他に、「へだてなし」という語が詠み込まれた歌は、尼になった女三宮の源氏への返歌「へだてなくはちすの宿を契りても君が心やすまじとすらむ（鈴虫・375）」という一首のみである。また、「隔て」と「心」がともに用いられる例には、源氏の病気の紫上に対する「契りおかむこの世ならでも蓮葉に玉ゐる露の心へだつな（若菜下・245）」という歌がある。さらに、大君物語以降、「隔て」という語が歌に詠み込まれる例は見当たらない。

www.kci.go.kr

亡せなむ、この君のかくそいゐて、残りなくなりぬるを、今はもて離れむ方なし、さりとて、かうおろかならず見ゆめる心ばへの、見劣りして我も人も見えむが、心やすからずうかるべきこと、もし命強ひてとまらば、病にことつけて、かたちをも変へてむ、さてのみこそ、長き心をもかたみには見はつべきわざなれ、と思ひしみたまひて、（総角・323）

これは、病状の大君が、自分に付き添って懸命に看病している薫を見て思うところである。ここで注意すべきことは、大君の出家願望が単に薫との結婚をさけるための理由だけではない点である。大君は、薫の深い思いやりや優しさに触れれば触れるほど、期待が裏切られたときの失望が大きくなることを恐れている。そして、そうならないためにも、自分には出家以外の途は残されていないという思いがいよいよ強くなった。大君にとって出家が死と変らないものであればこそ、大君の死は、薫との関係における「隔てなき心」を貫き通すためのものではなかったか。意図されたわけではないだろうが、大君が薫との関係で強調してきた「隔てなき心」は、結局大君の死によって成し遂げられることとなったのである。

大君の死ぬ間際に、薫に残した言葉は、

このとまりたまはむ人を、同じことと思ひきこえたまへとほのめかしきこえしに、違へたまはざらましかば、うしろやすからましと、これのみなむ恨めしきふしにてとまりぬべうおぼえはべる（総角・327）

というものであった。大君は、我が分身の中の君と結婚してくれなかった薫を恨んでいる。大君にとって、中の君のみが死後の心残りであり、それゆえ自分は成仏できないと大君は薫に言っている。大君が本当に男性一般に対して不信感を抱いたなら、薫を妹の中の君の結婚相手として思ったはずもなく、最後になって薫にむかって自分の望みどおりに妹と結婚しなかったことを恨むわけがない。また、大君が匂宮の中の君への扱いを不誠実だと思っていたことで、男性不信に陥り、さらに結婚するまいという思いを強めたとしても、それは薫という男性には当てはまらない。

大君は結婚をあきらめていた本来の意思とともに、結婚によって俗世間のもの思いを増やしたくない、もの思いの種となる結婚に踏み込みたくないと考えたのである。そして、薫と結婚できないのなら、これまでのように、互いの気持を分かち合う間柄として、その関係を維持していきたい、と望むようになり、大君は最後まで薫に身をゆるすことなく、薫の見守る中で「枯れゆくやうにて」この世を去っていったのである。

六　おわりに

以上のように、大君は薫との結婚をあきらめていながらも、「隔てなき心」を通して、薫と

www.kci.go.kr

関わり続けようとしている。大君は薫に対して、最初から精神的な結びつきを重視する関係を希求していたというよりも、薫と築いてきた同じ人間としての親密な関係が、結婚することで壊れてしまうのではないかを心配していた。不安感を抱きながらの生活よりは、いままでのように対等な関係のまま、互いを尊重しうる間柄として薫と関わり続けたいと大君は思っていたのである。大君がそう思うようになったのは、薫の結婚相手にふさわしくない自分の境遇を知っていたからに他ならない。

このように大君の薫に対する「隔てなき心」は、いわば、社会性を伴う夫婦という形を超えた大君の新しい結婚観とでもいうべきものと考えられる。こうした大君と薫の関係は、いうまでもなく晩年の紫上が源氏との夫婦生活に限界を感じたことで望むようになった新たな関係にほかならない。しかしそれは、あくまでも大君の死によってのみ可能であった。従って大君の意味の一つには、晩年の紫上が志向していた単なる男女関係を越えた同じ人間としての深い心の結びつきによる関係を築いたところにあると考えられる。

【参考文献】

源氏物語古注集成 7 『細流抄』おうふう
源氏物語古注集成14『岷江入楚』桜楓社
玉上琢弥 (『源氏物語評釈』角川書店、1967)
森岡常夫「宇治の大君論」 (『平安朝物語の研究増補版』風間書房、1967)
清水好子「源氏物語の主題と方法」 (『源氏物語研究と資料―古代文学論叢―』第一輯、武蔵野書院、1969)
石田穣二「大君の死について」 (『源氏物語論集』桜楓社、1971)
深沢三千男「宇治十帖物語の形成をめぐって」 (『源氏物語の形成』桜楓社、1972)
増田繁夫「大君の死」 (『講座源氏物語の世界』第八集、有斐閣、1983)

www.kci.go.kr

要 旨

大君は薫の妻にふさわしい資格のない自分の境遇を見据えて、薫との間に社会的な側面を重視する男女関係を断念し、より深い内面で結ばれた関係を求めるようになる。本稿は、そうした大君の結婚に対する姿勢を「隔て」という言葉をキーワードにして考察した。源氏物語の中で数多く用いられている「隔て」は、時間、空間、心理的な距離を表す語である。その中で心理的距離を表す用例を調べてみると、夫婦や恋人同士の内的葛藤を表すときによく使われていることがわかった。大君と薫の場合もそうした傾向は認められるが、しかし、他の用例とは違って大君の場合は、結婚に対する自己主張に近いものとしてあるのに特徴がある。それは、晩年の紫の上と光源氏との関係における問題を深く追求した結果であると考えられる。つまり、大君の物語では、男女不信や愛情不信によるいわゆる「結婚拒否」を問題にする次元を越えて、より親密な心の繋がりで結ばれた人間的な男女関係による今までとは異なった結婚観を垣間見ることができる。

キーワード；隔て、結婚拒否、男性不信、内面、死

투　　고：2008. 8. 31
1차 심사：2008. 9. 12
2차 심사：2008. 9. 27

www.kci.go.kr